

2011年 4月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 30



紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 22

(聞き手 高橋素子)

高橋 > このたびの東北関東の大災害は、言葉に表せないほどのものです。本稿の冒頭のご挨拶も、哀悼の意を捧げるほかありません。

会長 > これだけ大きな災害は将来、季語になるでしょうが、季語という形にしてしまうのは、不遜な気がします。地球規模の異変を、俳人がどう受け止めて俳句に詠むか。哲学的な課題ではないでしょうか。季節感をテーマにする文芸には不似合いです。まさに哲学的テーマの一句にすべきでしょうね。

高橋 > まだ余震が続いています。これ以上の災害に拡大しないことを祈らずにはおれません。

それでは、百九年前の滑稽の世界にカム・バックさせて戴きますね。本日は、前回の続きの「夏の部の人事」、季語は、「帷子」、「夏衣」、「夏羽織」です。

青空のやうな帷子(かたびら)着たりけり 一茶

帷子にいよいよ四角な爺かな 一茶

夏衣下手に縫せて袋かな 蓼太

宗匠の物識顔や夏羽織 鳴雪

ご解説よろしくお願い致します。

会長 > 「青空のやうな帷子・・・」、
色が真っ青で青空の様な帷子ということです。そういう派手な帷子は、当時でも気恥ず

かしいものだったのでしょうか。だから、それを着たという事を自嘲して書いたのです。

「帷子にいいよ……」、

お爺ちゃんは頑固者、一端決めた事は頑張って譲らない。その爺さんが角の尖った帷子を着ると、尚更、頑固者になるという事でしょう。

「夏衣下手に縫せて……」、

夏衣を縫って貰ったが、どうしても袋としか見えない。さて着てよいものかどうか……。現代なら新しいファッションですが……。

「宗匠の物識顔や……」、

羽織、袴は正装ですが、袴を着用しないで、羽織を着るだけでも格式が出るものです。宗匠は羽織を着た途端に、物識顔になった。言葉遣いも改まった。着るものが異なるだけで、態度ががらりと変わる人間の軽さが滑稽ですね。

高橋 > 情景が目浮かぶ様な面白いご解説、有難うございます。次は「蚊遣」です。当時は衛生面も悪く、蚊はそこら中にいた様で、多くの句が詠まれています。

雪隠に信玄おはす蚊やりかな 召波

雪隠の小城を攻る蚊遣りかな 也有

蚊も雪隠とは考えました。労せずして目的を達成しましたね。

蚊はこちへはいる隣のかやりかな 也有

今でも、お隣の害虫駆除のやり方によっては、全部の害虫が自分の家に来ると、怒っている人がいますが、昔も今も人の心は変わらず面白いですね。

垣越て墓の避行かやりかな 蕪村

妙法の妙はとむせる蚊遣かな 大江丸

会長 > 「雪隠に信玄……」は、
信玄のような武将でも、トイレで尻をめくれば、蚊に食われるから蚊遣りを置いて用足しをするという、まことに人間적でおかしみのある風景です。

「雪隠の小城を……」、
トイレは言ってみれば小さな城。その小さな城を蚊遣りを焚いて煙攻め。そういう事でしょう。

「蚊はこちへ……」、
お隣が蚊遣りを焚いて蚊がこちらへやってくる、迷惑な話だと。

「垣越て暮の……」、
あのいかつい顔をした蝦蟇でも、煙がたまらずに垣をこえて隣に逃げていく。

「妙法の妙は……」、
読経の途中で蚊遣りにむせる。キリのいいところでむせずに、読経の途中でむせるから、かっこ悪い。

高橋 > 有難うございます。次は「蚊帳」と「紙帳」です。
紙帳は紙の蚊帳ですね。

蚊屋を出て物争える翁かな 大魯
長持は夜着にゆづりて蚊帳哉 芦桂
紙帳釣て我世四角に送るかな 紅縁

会長 > 「蚊屋を出て……」、
蚊帳の中にいると気分的にも別世界。隠遁したような気分になるものです。まして翁となれば、隠居じみて俗世間とは離れた感じになるものですが、蚊帳の中にいると物音も良く聞こえるから、ついつい蚊帳を抜け出して俗世間の争いに加わりたくもなる。

「長持は夜着に……」、
長持は蚊帳などを入れて置くところですが、蚊帳を取り出して、代りに夜着を入れておくわけですね。

「紙帳釣て……」、
蚊帳もそうですが紙帳も四角な箱の中に入ってしまったような気分になるものです。自分の住む世界はこの真四角な中、と感じたままを書いています。

高橋 > あらっ！ 次の季語は、滑稽俳句協会の男性がお好きな「竹夫人」ですよ。夏になると、竹夫人の句が殿方から沢山、投句される様ですが…。それに比べて、以前このコーナーで、女性が抱く竹の枕は「竹奴」って言います、と申し上げましたが、女性は、どなたもご関心ないみたいですね(笑)。

屑籠をあかめまゐらせて竹夫人 瘦石

ここまで来ると、男性も可愛くて可らしいです。

会長 > 「あかめまゐらせて」は、つまり、「あがめまゐらせて」。屑籠のようなものでも、竹夫人の代りとなるとあれば、ありがたい事、だから崇めるのです。

高橋 > 次の季語は「夏袂」です。

つくはふた禰宜でことすむ御袂哉 撫村

禰宜(ねぎ)は、神主の下に位する神職ですね。

灸のない脊中ならずや夏はらへ 蕪村

会長 > 「つくはふた…」、お祓いは神職が腰を折るようにしてするものです。まるで、つくばうように見えるのです。つくばうだけなら宮司でなくても禰宜でもおなじ事。だからお祓いは禰宜さんにやっていただいても、むしろその方が安くて済む。そういう事です。

「灸のない脊中…」、

昔は民間療法である灸はごく一般的なものです。大方の人の背中に灸の痕があるものですが、夏袂いに裸になって、ああ、この人は灸の痕がないと、驚いているのです。

高橋 > 本当に面白いご解説ですね。続けます。
次の季語は、「打水」、「行水」、「単衣」です。

打水や蜘蛛の振舞のあはてやう 虚子

行水や峯の雲来る臍の上 虚子
累々として夫子がひとへかな 紅緑

会長 > 「打水や…」、
打水をした時に、蜘蛛が俺は捕まらんぞと逃げる右往左往が可笑しいのですね。

「行水や…」、
峰雲は雷雲の事。雷に臍をとられるという俗信が前提になっている。行水をしていてまだ終らないのに、雷雲が近づいてくるから気が気ではない。そんなところでしょう。

「累々として…」、
単衣の着物は、例えば、おじいさんのそのまた、おじいさんの代から譲り受けて使っているものでしょう。それを 累代または累々という。夫が着ていた単衣を子が譲り受け、そういう単衣で、その家の男性の気位のようなものを伝えられているような気がします。

高橋 > 成る程！よく分かりました。やっとこれで、「夏の人事の部」が終わりました。それでは、次は、夏の「詠物」の部となります。少し覗いてみましょうか。ご解説下さいね。

---- 楠昔物語

いさかひに姉はまけたる職かな 也有

---- しろしろと見れば餘所の天井なり

短夜や高い寝賃を出した事 来山

---- 艸庵の急雨

夕立に家流したる乞食かな 巴風

会長 > 「いさかひに…」、
幟というのは、端午の節句の幟でしょう。三月の雛祭りは女の子、五月の節句は男の子。姉と弟が争いをしている。折りしも、端午の節句。ここは弟を立ててやらねばならず、姉は男の子の威厳を保つために、わざと負けて見せる。家人も端午の節句だから、お姉さんは弟に譲りなさいと言ったところでしょう。

「短夜や…」、
まんじりともせず、早々と夜が明ける短夜を、寝たという程でもないのに高い寝賃になったわい、という事ですね。

「夕立に…」、
簡素な草葺きの庵で、路上で生活している人には、前書きにある艸庵の急雨、つまり、夕立にはひとたまりもなく流されてしまう。なんとも哀れな出来事を描いています。

高橋 >

今日もまた、ウイットに富んだひと時を有難うございました。
この数日、大地震・大津波・原発事故等、未曾有の出来事に、文明、科学を勝ち誇った人間も大自然の前での無力さを、つくづくと感じさせられています。胸のつぶれる様な悲しい大事件ですが、被災者の方々に勇気づけ、この貴重な経験を未来に活かせるような一句、お願い出来たらと思います。

会長 >

悲しい大きな出来事を前に、思いは五七五に単純化できかねるものです。せいぜい、鳥雲へや春の闇という季語しか思い浮かびません。

人間は津波に吞まれ鳥雲へ 健

余震いつまで陸奥(みちのく)の春の闇 健

被災者の皆様、ご関係者の皆様、一日も早い復興を、心よりお祈り申し上げます。